



情報科学芸術大学院大学附属図書館

vol. 2

2015.12

IAMAS 図書館便り

IAMAS [イアマス] とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。



特集 詩人・映像メディア学 松井茂

- 自著・自作を語る
- 人生を変えた一点
- 学生に薦める一点

●私のイチオシ -学生が薦める本-

●館長コラム

●お知らせ

- 【修士論文執筆対応】貸出冊数上限を 14 冊に
- 図書館アンケート調査を実施ほか

特集 詩人・映像メディア学 松井茂 (まつい しげる)

この特集では、IAMASの教員に、自著・人生を変えた本・お薦めの本などを紹介してもらいます。

第2回は、今年度よりIAMASの教員に加わった松井茂准教授です。



イラスト：だつお

→メディアとしての図書館

「図書館は奇跡のサービスだ」と聞いたことがある。古今東西有史以来の「知」にアクセス・フリーであることを考えれば、このキャッチフレーズに偽りはない。特に、ウンベルト・エーコ、ジャン＝クロード・カリエール『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』(阪急コミュニケーションズ、2010年)のタイトル通り、未来に向かって「本」が消えつつあることは確かだ、だからこそ図書館は、収蔵庫としての役割よりも、アクセス・フリーな「知」の記録メディアとして捉え直されつつあるといえる。いまこそ「図書館は奇跡のサービスだ」というモットーを考えるべきなのだ。

端的に言えば、ローレンス・レッシング『クリエイティブ・コモンズ デジタル時代の知的財産権』(NTT出版、2005年)やクリス・アンダーソン『フリー』(日本放送出版協会、2009年)といったゼロ年代のネット・カルチャーの基底に、改めて図書館を意識してみよう。そして、文庫の記憶としての「知」を、自由に無料で共有する「奇跡のサービス」メディアとして使いたい。私たちをとりまく「知」の循環を体感すること、つまり歴史を探索することで、現在の「知」と「メディア」と「テクノロジー」を巡るフィールドワークが実践できることに気づくはずだ。

メディア表現研究の実践を通じて、本学の図書館を考えること、映像資料や電子資料の活用手法、遑て非図書資料である印刷物の資料化、検索、分類、タグ付け、バージョン管理、知財としての運用等々……は、学術にもビジネスにも活用できる社会制度の設計そのものに関わるのだから。

蛇足だが、某大手レンタル店が図書館に注目するのも(善し悪しは措くが)、「フリー(自由と無料)」の周辺にチャンスがあることを知っているからだ。

いまIAMAS図書館では、ほとんどあらゆることが可能である。「図書館の自由に関する宣言」(日本図書館協会)を検索し、「奇跡のサービス」が権利であることを認識し、「知」という「フリー」から始めよう。



NTT出版/2005年



日本放送出版協会/2009年

→自著・自作を語る シニギワ『Roadside Picnic』(DVD)

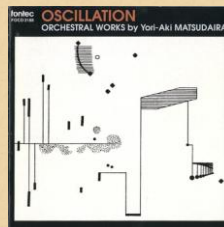
長寛寛幸とのバンド、シニギワによる映像作品で、「デジタル音響技術による新たな物語表現研究」(科研費)の表現研究成果。デジタルの音声合成を表現に活かし、サウンド・デザインを基盤とした映画制作のワークフローの改変を提案した。ワークフローに関しては、勅使河原宏の短編映画『白い朝』(1964年)において、武満徹(作曲家)と奥山重之助(サウンド・エンジニア)が、安部公房の脚本に先だってサウンドトラックを制作し、音響が物語表現を主導した事例に注目した。奥山のインタビューは、川崎弘二、松井茂『日本の電子音楽 続 インタビュー編』(engine books、2013年)に収録。物語表現としては、311による放射能汚染を主題とするに際して、アンドレイ・タルコフスキーの映画『ストーカー』(1979年)、ストルガツキー兄弟の原作『ストーカー』(ハヤカワ文庫、1983年。原題が『路傍のピクニック』1972年)、ボツになったシナリオ『願望機』(群像社、1989年)の映画、小説、シナリオを先行事例と位置付けて参照した。



自主制作/2014年

→人生を変えた一点 『発振/松平頼暁オーケストラ作品集』(CD)

大学受験の帰りに行ったコンサートのライブ録音版。いま考えると、このコンサートが



フォンテック/1995年

人生の転機だったと思う。詳細は、川崎弘二と編集した「松平頼暁 What's next?」(『洪水』第13号、2014年1月)を参照。

→学生に薦める一点 アルフォンソ・キュアロン『ゼロ・グラビティ』(Blu-ray)

『表象』08(2014年)の特集「ポストメディア映像のゆくえ」において『ホワッチャドゥーイン、マーシャル・マクルーハン? — 感性論的メディア論』(NTT出版、2009年)の著者である門林岳史が指摘するように、本作冒頭の10分以上の長回し(風)のシヨットには、文字通りレフ・マノヴィッチの『ニュー・メディアの言語』(みすず書房、2013年。原著は2001年)があり、ロザリンド・クラウスが指摘する「ポストメディア的条件/状況」が明瞭だ(『表象』所収のクラウス「メディアムの再発明」参照)。なにはともあれ、私たちを魅了するシーン、つまりは無意識に私たちを吸収する表象を解析する批評力こそ、制作者が身につけるべき知性である。『ゼロ・グラビティ』Blu-ray版に収録されているメイキングも必見で、この撮影風景こそが現在のメディア表現の神髄だろう。



ワーナーエンターテインメント
ジャパン/2014年

私のイチオシ —学生が薦める本—

本学の1年生にお薦めの本を紹介してもらいました。図書館で展示しますので、ぜひご利用ください。

(似顔絵: 丹羽彩乃さん)

内田樹『私家版・ユダヤ文化論』

語られるのは単なるユダヤ論ではなく、ユダヤ人問題が既に構造的に組み込まれた世界、あるいは絶対の他者と自己についての話である。ユダヤ文化論と銘打たれてはいるが、読んでも決してユダヤを理解することはできない。「私は決してユダヤを理解することはできない」ことだけが理解できるのだ。知性とはその不可能性の上にか立脚し得ないことを棘をもって教えてくれる一冊。(文藝春秋/2006年)



塚原真梨佳さん



高野秀行『謎の独立国家ソマリランド』

内紛の多いアフリカ近隣諸国とは違い平和で民主主義が成立している国家、それがソマリランドです。それだけでもなぜそうなったのが理解し難いですが、他にも寛醒植物を日常的に噛んだり、でも一度働き出すとまるで日本人のようにせっかちに働いたり、遠く離れた地の想像も出来ないような生活が面白く紹介されています。大垣からアフリカに行きたくなること請け合いの一冊です。(本の雑誌社/2013年)



松野峻也さん



ヴィクター・J. ババネック『生きのびるためのデザイン』

本当に必要なデザインとは何であろうか。本書は、そのことをひたすらに問いかける。本文に登場するデザインは、現在では古めかしく思うかもしれない。しかし、今なお本書で語られるババネックのメッセージは、私たちを共感させる。生きることに必要な事とは何か。それは、デザインの領域を超え、他領域に属する人々にも、同じ問いを投げかけることができるのではないだろうか。(晶文社/1974年)



山本美里さん



館長コラム その2 ただ読むこと

書物の山は大海原のようでもあり、同時に樹海のものである。要するに、読者という旅人は、仮に羅針盤や水先案内人があったとしても、只管迷うのである。書物とは、畢竟、何かを知るとか何かを悟るためにあるのではなく、ただ迷うために存在するのである。殊に、インターネット全盛のこんにちにおいては、書物から得られる「情報」など微々たるものであり、その容量も速度もコンピュータやスマホに到底勝てるものではない。だから、書物から情報を得ようなどという試みは断念すべきだ。書物は、文字通り「物」である、オブジェである。そこには経文か呪文のように文字が書き連ねられているが、その内容が重要なのではない。空海がわが国にもたらした膨大な経典や、南方熊楠が幼少のときに書写した『本草綱目』などは、それらのおびただしい情報よりも、「もたらした」「書写した」という行為こそが重要であり、尊いのである。つまり、書物は「読まれる」ことこそが、書物にとってもっとも気高い行為となるのだ。呼吸ををするときに、いちいち酸素と窒素の含有率をモニタリングしないでだろう。息を吸い、吐くだけだ。読書とはそのようにきわめて生理的・本能的な行いであるのだ。



ウンベルト・エーコ、
ジャン＝クロード・カリエール
『もうすぐ絶滅するという
紙の書物について』
(小林昌廣教員室にて)

お知らせ

→【修士論文執筆対応】貸出冊数上限を 14 冊に

修士論文を執筆する2年生限定で、2015年12月1日から2016年2月10日（修士論文発表）までの期間、貸出冊数の上限を14冊（通常7冊）に緩和します。図書館資料を活用して、修士論文を書き上げてください。

→図書館アンケート調査を実施

学生への図書館アンケート調査を、2015年11月27日から12月11日の期間に行っています。このアンケートは学生のみなさんの要望を図書館運営に反映するためのもので、充実してほしい資料のテーマ・分野のほか、図書館の満足度についても尋ねています。この機会に図書館への要望をぜひお寄せください。

→資料展示 2015.9～12

資料展示として、リクエストで購入した本の展示（9月～10月）、「美術手帖」書評掲載の本展示（10月～11月）、【読書週間企画】読書術の本展示・古本市（10月～11月）、論文作法の本展示（12月～）を開催しました。「美術手帖」～展示では、該当ページを開いた「美術手帖」を本とともに展示したことで、書評を参考にして本を借りる学生が多く見られました。

→「黒板」開始一周年

図書館に親しみを感じてもらうためにはじめた「黒板」による広報が今月で一周年を迎えました。黒板は、司書2人、一ヶ月交代で書いています。毎日更新するために何を書くか日々頭を悩ませていますが、イラストやプライベートな話題を入れるなど私たちも楽しみながら続けています。なお、黒板は写真で残しており、図書館の記録としても役立てたいと考えています。

